



(I)

九谷  
六口

抱かれても 瞼の裏には 別の顔  
だから女は 目を瞑るのか

虫の音に 混じり一つの 蟬が鳴く  
婚期逃して  
その声哀れ

一年の 計がこの日に あるならば  
今年諦め  
来年を待つ

春過ぎて 夏来たりなば 秋恋し  
冬の寒さも  
四季の温もり

生更和月ぎて草木 弥生卯月る春 迎え

恋卯月のうづきか  
サツキ芽癸月を出す



独樂もなし 風も揚がらず 静かなり

子供の声が

消えた正月

酒樽に漬かつて呑めば 酌いらぬ

出汁もほど良く

これぞ極樂

団塊の 定年迎え 弁護士が

恵比寿顔にて

離婚繁盛

満月を 背に咲き誇る 桜花

散るを覚悟の

その艶やかさ

霜月の 月は朧に 冷え込んで

ぬしと熱燗

後で下突き



夏場だけ 元気に歩く 巨乳かな  
顔見る人は  
ただの一人も

跡付けて 歩みし道も 初雪と  
共にいずれば  
消えてなくなる

体重が 増えれば見た目 氣になるし  
減れば減ったで

やまい  
病氣になる

雪だるま 小春日和に 誘われて  
はしやぎ過ぎたか  
べり掻き消えた

懐かしき 遙か昔の 初恋の  
あの人はまだ  
二十歳の姿

